
New World Order

道造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New World Order

【コード】

N4218BA

【作者名】

道造

【あらすじ】

月姫とHELLSINGのクロスオーバー。

極東相異

今夜も、月が出ていた。

銀月が、闇夜を丸く切り取ったようにして、ただそこにある。背筋が震え、見惚れてしまうような冷たい美しさ。

ガラス戸から差し込まれるその光。

それに照らされた彼女の金髪が、銀色へと変色していた。

彼女と今宵の月の雰囲気は、稀に見る名演と違っていいだろう。だが

そんなことを、この吸血鬼が考えたかどうかはわからない。

「日本だと」

黒く赤い闇の混じった、衣服と帽子とサングラスに身を包む男。

アーカードは、言葉を反芻するようにして呟いた。

反芻しているのは、目の前に居る麗人の科白。

「そつだ、日本だ」

彼の主 インテグラはそう吐き捨てるように呟き、卓上のヒュミドルから葉巻を取り出す。

「アーカード、セラス、ベルナドットの三名は、今すぐにも日本に飛んでもらう。すでに円卓会議の許可は得ている」

すでに決まった事を、ただ報告するために。

インテグラは言葉を、少しも語尾が揺れない口調で垂れながす。

アーカードも動じた様子は無く、表面上はつまらなさ気に言を返し

た。

「特務機関『HELLSING』が、大英帝国と国教を犯さんとする反キリストの化物を葬り去るゴミ処理係が、アジアの極東、まして無神論者ども国へ何のオーダーだ」

アーカードは老人のように酷く重たい声で、ゆったりと言葉をひとつまみに返していく。

インテグラは慣れた様子で、葉巻の先をあぶっている最中だった。

それを中断する気はなく、口に一度啜えた後で、彼女はもう一度喋り始める。

「ミレニウム」

端的に、一言告げる。

葉巻を一度灰皿に置き、そして立ち上がった。

「ミレニアムの資金源に、そして吸血鬼研究に、日本が絡んでいるという情報が入った」

「ずいぶん急な話だ」

「ヴァチカンからの情報提供だ。奴等は信用していないが、情報は嘘とも思えん」

インテグラは死ぬ程嫌そうに声色をあげた後、アーカードに背を向け、ガラス戸から外の様子を覗き見た。

灰皿に置かれた葉巻の薄い匂いが、鼻腔をくすぐる。

この部屋の匂いは、いつもこれだけだ。

だが、それを示唆する言葉をアーカードは吐かない。

「それにしても日独同盟とは、随分ナンセンスで可笑しい話だ。ナ

チスといい、人間の執念というものはここまで死に絶えないものか」
「……敵は国や軍隊ではない。そして個人でもない。企業だ」
「ほう」

アーカードの口から、愉しそうな感嘆がもれる。
それと同時に、後ろから声がかかった。

「太平洋戦争後、アメリカGHQによる日本財閥の解体前、歴史の闇中に消え失せるはずだったその富は、全て奴等『ミレニウム』に投資された」

ヘルシング家執事、元ゴミ処理係の老人の声。
ウォルターは酷く分厚い資料を右手にぶらつかせながら、言葉を続ける。

「それは現在も変わらない。日本企業による資金の供給・技術の提供は続けられ、ミレニウム計画の因子。その協力への見返りの一つが日本にある」

「見返り、とは」

アーカードは背後のウォルターに振り返ることもなく、目の前に言葉を投げかける。
彼の主は答えた。

「それを調査するのが、お前の仕事だ」

インテグラは、自分の従僕の正面へと向きなおる。
そして命令を下した。

「命令は唯一つ『見敵必殺』。我々の邪魔をするあらゆる勢力は叩

いて潰せ。全ての障害はただ進み、押し潰し、粉碎せよ」

彼女の従僕はその言葉を聞きながら、愉しそうに顔を歪ませる。

身体を屈め、手を胸に当て、まるで騎士の礼式のような格好を披露した後、それを、受諾した。

「認識した　我が主人」

鳥がさえずり、そのリズムにあわせてコツコツと足音が聞こえる。その足音はカツ、と最後に一音鳴らした後、ドアの前で止まった。

ドアの表札には『部屋番号2C』と書かれている。

足音の持ち主は、チャイムを鳴らす。

チャイムが鳴り止み、一刻置いて。

ゆっくりとドアが開き、ドアからは水色の瞳をした女性が出てきた。

「あれ、遠野君。こんな朝から迎えにきてくれるなんて、珍しいです
すね」

「いえ、ちょっと色々ありました……」

遠野志貴は、シエルのアパートの玄関口で佇んでいた。

「またアルクエイドですか……」

シエル先輩は、俺の目の前にゆで玉子のスライスとパンが添えられたカレーを置いてくれた。

朝からカレーか、とは思うが、それを口には出さない。

ライスではなく、パンで食べることができるのは、せめてもの心配りだと思っから

それは素敵な意思の疎通。ハレルヤ

……本当は嫌だ、なんて口が裂けても言わない。

「ええ、朝方俺の部屋に忍び込んでるのを見つかって、また秋葉と大喧嘩です。とばっちりに遭う前に家から出てきました」

はあ、と先輩はため息をつき、同情の視線をくれた。

「だからといって、朝ご飯を食べないのは良くありませんよ。遠野君はただでさえ身体が弱いんですから」

それはそうだけど、あそこに居た方が精神的にも肉体的にも危険でした。

時限爆弾のタイマーのように赤く染まっていく秋葉の髪を思い出し、俺はため息をつく。

そして、茶のみに両手を添えているセンパイへと目を移した。

「……ところで先輩。最近、何かあったんですか」

「あれ、どうしてそんなことを聞くんですか」

目をきよとん、とさせて、センパイは返事を返す。
胸の前で、はた、と両手を合わせていた。

シエル先輩のカレー皿は、すでに空だった。

「……夜のパトロールの時、様子が変でしたから」
「……………」

週に一度やっている、使徒調査。

すでにほとんどは殲滅して、それほど気を張る必要も無い。

どちらかというと、ほとんどセンパイとのデートと化しているような状態だったのだが。

最近は、そんな雰囲気を感じられない。むしろ、必要以上に警戒をしている。

しばしの沈黙の後。

シエル先輩は、ぼん、と両手のひらを合わせ、笑顔で口を開いた。

「ところで、インド風ビーフカレーに対して、インドじゃ牛は食べないよってツツコミたくなりませんか？」

「誤魔化さないでくださいよ」

大体、誤魔化し方にも無茶がある。

先輩は大きいため息をついた後、眼鏡の奥の目を細くして、小さく呟く。

「……全く。そういうところにだけ、遠野君はいつも鋭いんですから。女心には疎いくせに」

「はい？」

シエルは細めた目を開いて、志貴の顔を眺める。

純粹な朴念仁の表情だ。

少々腹立たしかったが、シエルはこの顔が嫌いではなかった。

「まあ、いいでしょう。話します。とはいっても、隠すようなことじゃないんです。大したことじゃないから言わなかっただけで」

センパイはズズ……とお茶をすすする。

どうやら少し熱かったらしく、顔が微妙に赤く染まる。

我慢して何事も無い表情をする姿が、愛らしかった。

「……最近、教会から警戒を強めるようにいわれているんです。なにかと世の中も物騒になってきたので」

「世の中って、吸血鬼絡みのことですか」

「はい。まあ、最近色々あるんですよ」

先輩はテーブルの食器を重ね、二人分を持ってキッチンに向かう。

「場合によっては、私も埋葬機関から召還されるかもしれませんね」

センパイは事も無げに言った。

「……それって、大変なことなんじゃないですか」

「まあ、それは大袈裟な話で、まず大丈夫だと思います。教会には私より強い人もたくさんいますから、日本で事件が起こったりしない限りは……」

ブルルルルルル

突如、受話器が鳴りだした。

会話を中断し、センパイはすぐさま受話器を手にとる。

「はい、シエルです。　　少し、待ってください」

センパイは受話器の口を、手で抑えて俺に目線を送る。

「すいませんが、遠野君。学校には遅刻することになりそうです。先に行つててもらえますか」

教会からの伝達だろうか。

シエル先輩は不意に、笑顔だが冷たい、そんな顔になった。

「えっ、いえ、誰もいませんよ」

シエル先輩はもう俺に目をむけることもせずに、そのまま電話の相手と話を続ける。

俺のことを、細かく教会に報告するわけにはいかない。

何かと面倒なことになるだろうか。

「……じゃあ、先に行きますね」

短く告げて、学生カバンをひつつかみ、静かに部屋から出て行く。さっきの話の流れからして、少し心配だが……

「ち、違います。ウチにファックスがないのは、決してカレーにつきこんだからじゃありません。ええ、調査費用に資金を費やしたんです」

そつでもないようだった。

メシアンに毎日のように通うのは、調査というのだろうか。

少しセンパイの上司に同情しながら、俺は部屋から出て行った。

シエルはそんな志貴に手を振ることさえせず、ただ会話に集中して

いた。

ただ耳元に垂れ流される、埋葬機関ナルバレック局長の言葉を一つ一つ脳の中に摘み取る。

そして彼女は嫌悪している上司に対して、ゆっくりと受諾の言葉を述べた。

「……………ええ、わかりました。埋葬機関第七位異端審問者『弓』は今より、ローマカトリックヴァチカン法皇庁特務第十三課イスカリオテ機関、マクスウェル局長の指揮下に異動します」

言い終えるとともに、ガチャン、と受話器を落とす。

それから一寸の刻も空けずに、シエルはクローゼットを開けた。

薄暗い。いや、わざと照明をつけてない薄闇の暗室。どこの国でも、どこの場所でも、たとえ雲の上でも夜だけは等しく全てに闇を与える。

セラスとアーカードは身じろぎすらせずに、ただ黙って、そこにいた。

「……………マスター、この飛行機、いつ頃日本に到着するんですか？」

「……………」

セラスの質問に対して、アーカードは無視するかのように横の窓ガラスの外を覗いている。
せつかくのファーストクラスに常備された本も、映画も、音楽も、全て愉しむことが出来ない。
だからといって、上空三メートルの世界に興味があるわけでもないのに

私の質問にくらい答えてくれてもいいじゃないですかあと、セラスと思う。

「嬢ちゃん、そんな格好の奴に、誰も答えたくなんか無いと思うぞ」
ベルドナツドは、少し離れた座席から声をかける。

「だって、ここから出たら灰になっちゃうじゃないですか」
セラスは安っぽいカンオケの中で、顔を出すことすら出来ずにいた。身動き一つとれず、夜に慣らした身体ゆえ眠ることすら出来ない。唯一感じ取れるアーカードの気配に対し、ただ不平を心の中でもらすだけである。

「セクハラ隊長こそ、その明かり消してください。イジメですよ」
「箱女なんか、楽しい読書を邪魔されるいわれはない」

ベルドナツドは少し離れた座席に居た。
パイロットを除いて彼ら三人が独占している飛行機の中で、気分良く後ろの二席をとって寝転がり、わざわざ持ち込んだ私物のランプをつけ、セラス曰くセクハラな男の雑誌を読んでいる。

「ああ、私の人生不幸続き……これからどうなるんだろう」「神父かシスターにでも相談したらどうだ。

もれなく『白木のくい』か『銀の弾丸』をプレゼントしてもらえる」

二人、くだらない会話を続ける。

そんな中でアーカードはただ一人だけ、窓の外を眺めている。

ただ外の闇を見続けている。

月が見えない。

もうすぐ満月も近いはずの十三夜月が見えない。

この雲の上で　だ。

代わりに、なにやら不快と感じる闇がそこにある。

ざわり、と

突如その闇が動く。

闇の中に、赤い目があった。

この生物の進入を拒む高い空にいて、限りなく速く飛んでいる飛行機の横に並び、平然とアーカードに視線を合わせている鳥がいる。

鴉だ。

いや、正確には違う。

吸血鬼の、鴉、だ。

「……………」

アーカードはその鴉と視線を合わせたまま、ギョロリと眼の瞳孔を開く。

が、鴉は変わらない。

アーカードの魔眼を受けても、その鴉は、何も変わらない。

ただ黙ってアーカードの一挙一動を監視している。

「……面白い」

「……？ マスター、どうかしたんですか」

セラスの間の抜けた声が、アーカードの聴覚を刺激する。

次に頬の緩みを感じ、声帯が揺れるのを覚え、アーカードは笑った。

「面白いぞ婦警。今回のオーダーは、とても面白いことになりそう
だ」

アーカードは自分の呟きを反芻しながら、次に期待した。

自分の蝙蝠に喰い殺される、哀れな鴉を見やりながら。

電話が鳴る。

それは想い人からの電話でもない限り、大抵は不愉快なシグナルだ。
だが、彼女は二回目の電子音で、その受話器をすぐに取り出した。
た。

今回の電話は、特別だから。

「こちらシエルです。貴方は」

「丁寧な挨拶をありがとう。私はイスカリオテ13課の長をやって

いるマクスウエルと申します」

やや皮肉気味な言葉が、受話器の向こう側から聞こえた。とはいえ、悪意ではないだろう。この人の性質といったところか。

「さつそくで申し訳ありませんが、辞令は届きましたか？」
「ええ、先ほどナルバレック局長から。随分と不機嫌でしたよ。私が日本になんかいるから、恥をかくのだと」

あの人のねちねちとした皮肉に比べれば、むしろこの人の声色はスツキリと聞こえる。

その意味でも、今回の件はむしろ感謝すべきかもしれない。

「彼女にとっては不愉快かもしれないが、教会にとっては幸運だ。貴方が埋葬機関の『弓』であること、そして今現在『日本』にいたことが。なにぶん、使える部下が少ないものでしてね」
「…… 光荣です。マクスウエル局長」

未だ信じられないが、今回の異動はどうやら正式な辞令であるようだ。

いや、正確には指揮権がマクスウエル局長に移っただけで、私が埋葬機関に在席していることに変わりはないのだが。

「局長。申し訳ありませんが、今回私が異動したのは……」
「そういえば、まだ理由を説明していませんでしたか」

カツン、とペンで机を叩いたような音が聞こえる。
随分機嫌がいいようだ。

「最近、身の回りに不審な動きがありませんか？」

「……ええ、今もそこに見張りがいます」

窓のカーテンの隙間から、赤い目をした鴉に目を向ける。

今すぐにでも黒鍵を投げつけてやりたい、気持ちの悪い視線だ。

「それが、今回の、敵です」

「……吸血鬼、ですか？」

「そうです。もつとも、君を監視しているモノは、ミレニウムとは少し毛色が違うようですがね」

「ミレニウムが日本に来てるんですか？」

私の疑問に対して、マクスウェル局長の時間が少し、止まる。

「……」

「……」

何か、不思議な沈黙が起こった。

「ナルバレック局長から、何も聞いていないのですか？」

「……ウチにファックスが無いつて言ったら、怒って電話切っちゃいました」

というか、切るときに電話機が破壊されたようです。

ゴシャン、と不気味な音がなっていました。

「それくらいの設備は、当然義務化されているものと思っ
たが……」

飽きた声をされた。

少し、私も額に汗をかく。

いえ、あれは調査費なんです。本当に必要なんです、生きるために。

「……まあ、いいです。どのみち重要なことは今晚来日するうちの派遣兵力が、直接伝えることになっていきますから」

「……派遣兵力、ですか？」

イスカリオテから……当然といえば当然ですが……
少し嫌な予感が。

「貴方に課せられた命令は二つ。一つは、敵から得られるであろうミレニアムに関する全ての調査と殲滅」

「はい。それは得意分野ですから……しかし、二つ目は？」

それだけなら、私が出る幕はないはず。

なにせ、あの『絶滅機関』には

「二つ目は 本日深夜に到着するであろう。英国国教騎士団『HELLSING』と私達イスカリオテの派遣兵力。アレクサンドルアンデルセン、高木由美子、ハインケル、ウーファーとの仲介役」

「ア、アンデルセン神父が来るんですかあああ！」

嫌な予感は当たる。

私の悲鳴はアパート全体に響いた。

「……うつわー、日本だ。日本ですよハインケル」

飛行場

高木由美子の声は、悲鳴のようなへりのプロペラ音に押し潰され、それは対象としたハインケルの耳には聞こえず、アレクサンドリアンデルセンの鋭角な聴覚だけにのみ届いた。

「そういえば、由美子は日本人でしたね」

アンデルセンは思い出したように言う。

「……いえ、神父様。フツーそんなこと忘れませんか？」

「あんまり、興味がないですから」

そう言い捨てながら手を眉間にやり、眼鏡のフレームを整える。その手を包む白手袋には、神の刻印が印象的に施されていた。

「……まあ、なににせよ日本なんですよね」

由美子はもうアンデルセンとの共感は期待できないと思い、一人呟く。

だが相手がハインケルだとしても、同様の結果だったであろうことを知る羽目になった。

「感慨に浸っている暇は無いぞ、由美子」

声とともに、何か重たいものが由美子に投げつけられ

「それ」を受け取るとともに、重みでバランスが崩れた。

「きゃ、きゃあ」

受け取った日本刀を、お盆でも持つかのようにして両手で掴むが、腰に力が入らず、そのまま重みにおされて後ろへ後ろへと後退していき コケた。

「きゃふう」

肺から空気が押し出され、マヌケな声があがる。

「……まあ、まだお前の出番は必要じゃないからいいけど さ」

日本刀の重量に潰され、地面に仰向けに倒れている由美子を見てハインケルは軽いため息をついた。

そして、すぐに近くにある薄闇へと視線を変える。

「それにしたって、息つく暇もないねえ」

コートの下に、その手を伸ばしながら、横の神父へと呼びかける。

「ハインケル。局長からの指示は」

特に気にした様子も無く、アンデルセンはそれを傍観しながら、首から下げたクロスに軽く触れる。

まるで何かの『滅び』に祈るようにして、その姿はあった。

「ここは無宗教地帯、あまりに過激な行動は慎むように。そして

」

ハインケルの左手に、グリップが収まる。

そこからの振動を糧にして、力が銃口に収束し

薄闇の鴉に向けて放たれた。

ごり、という鉄の塊が木を削ったような音が、鴉の悲鳴、羽や血、体液ともあたりに飛び散る。

その全てが塵となつてかき消え、気持ちばかり闇を深く濁す。

「我ら神罰の地上代行者、いかなる敵にたいしても引き下がってはならない。我等が使命は我が神に逆らう愚者を絶滅すること」

ハインケルの冷たい咳きを聞きながら、アンデルセンは薄く笑った。同時に自分の武器、銃剣を取り出し

その数本をハインケルと同じく、薄闇の鴉達に対し投げつける。

「土は土に 塵は塵に 灰は灰に

この極東にも神のご加護があらんことを、Amen」

狂気の神父の叫びが響く。

極東の夜は血袋が弾けるようにして、闇が赤く染められていた。

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218ba/>

New World Order

2012年1月11日03時56分発行